

## 報告

## キルギス共和国ケン・ブルン(Ken・Burun)遺跡の瓦に関する一考察

櫛原 功 一<sup>※</sup>

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

I. 資料

II. 製作技法と関連資料

III. キルギス国内の瓦

おわりに

## はじめに

2019年夏、キルギス共和国のケン・ブルン遺跡において多量の遺物が採集され、現在、キルギス共和国科学アカデミー内に保管されている。2022年8月、アク・ベシム遺跡の調査研究の折、ケン・ブルン遺跡の遺物保管状況や遺物の内容を確認したところ、資料中に瓦が複数存在したことから、若干の考察を加えて報告する。

ケン・ブルン遺跡は、キルギス共和国の首都ビシュケクの東方、約40kmに所在する。アク・ベシム遺跡の北西8.1kmに位置する都城遺跡で、アク・ベシム遺跡とクラスナヤ・レーチカ遺跡との間にある(図版1)。2009年に鍍金青銅製の仏像が古物商に持ち込まれたことからキルギス国内の研究者らに注目されたもので、イスラーム資料にあるバンジカット(Banjikat)もしくはパンジカット(Panjikat)、『皇華四達記』記載の「米國城」という都城がこの遺跡に該当すると考えられている(山内ほか2016)。

この遺跡は、チュー川が形成した段丘崖を利用して形成され、崖に面したシャフリスタン南側にラバトが隣接し、ラバトの一部は堀で区画されている。シャフリスタンは200×270mの五角形で、五角形の頂点にあたる先端は小高くなっていて、チタデルと推定されている。アク・ベシム遺跡やクラスナヤ・レーチカ遺跡に比べると小規模で、城壁構造は明瞭ではない。

これまでに正式な発掘調査は実施されていないが、2011年に東京文化財研究所による遺物の表面採集が実施された。安倍雅史、山藤正敏らによれば、採集遺物はプレ・カラハン朝時代(9世紀半ば以前)、カラハン朝時代(9世紀半ば～13世紀初)、ポスト・カラハン朝時代の遺物であり、ケン・ブルン遺跡は9世紀半ば以前から13世紀以降まで営まれたことが

推定されている。報告された資料中に、本報告で紹介する丸瓦と同類の資料1点が存在する(山内ほか2016)。

さて、2019年8月、ケン・ブルン遺跡内のラバト付近を通る道沿いに、レンガの粘土採取のための長さ100m、幅35m、深さ5m程度(A地点)、および長さ40m、幅20m、深さ数m(B地点)の2箇所の大規模な掘削が行われた(図版1-3・5)。この情報を得てキルギス文化省では工事の中止を命じ、現地に散乱する遺物を回収するとともに、すでにレンガ工場に持ち込まれた大量の土中から土器や埴、石器などの遺物、動物骨を回収し、洗浄、収納した。現在、回収された土器、動物骨、石製品を収めた遺物類のうちの一部である20数箱が科学アカデミーの倉庫内に収蔵されている。帝京大学では2019年8月、遺跡から取り上げた大型甕や一部の瓦について、アク・ベシム遺跡の遺物調査の際に復元、図化を実施した。

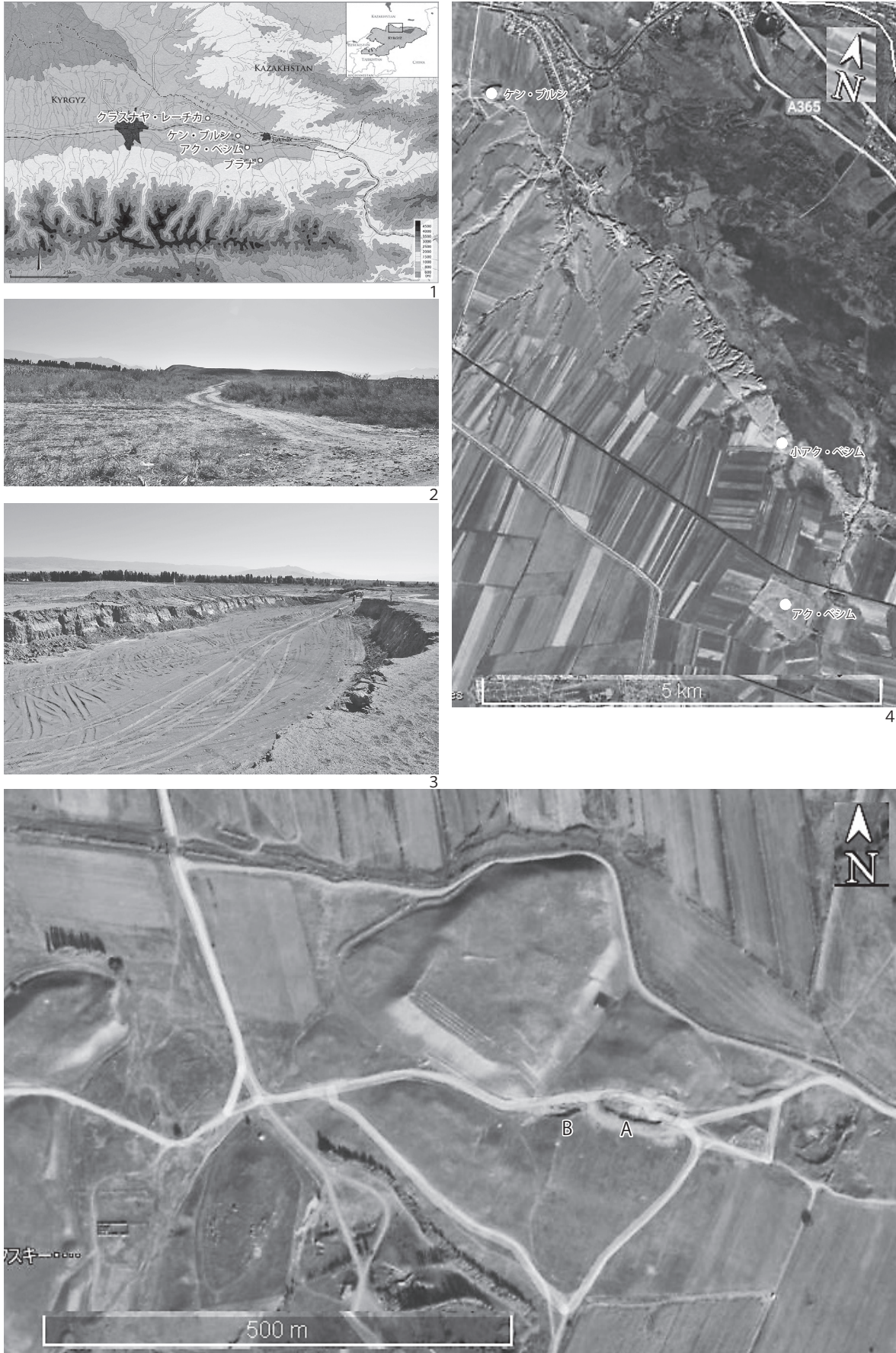
その後、2022年8月には科学アカデミーの倉庫で保管されている遺物をあらためてチェックし、主要遺物を選んで写真撮影するなかで、瓦資料を9点確認した。中央アジアでの瓦の変遷を探るうえで重要な資料と考えられたことから、実測、図化したもので、ここで資料紹介し、製作技法や技術的な系譜性について、若干の考察を行う。

## I. 資料(第1～3図、図版2)

瓦は平瓦(4・5・7・8)4点、丸瓦(1～3・6・9)5点の計9点で、丸瓦1点については接合により全形が復元された。なお、軒瓦は未確認である。

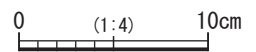
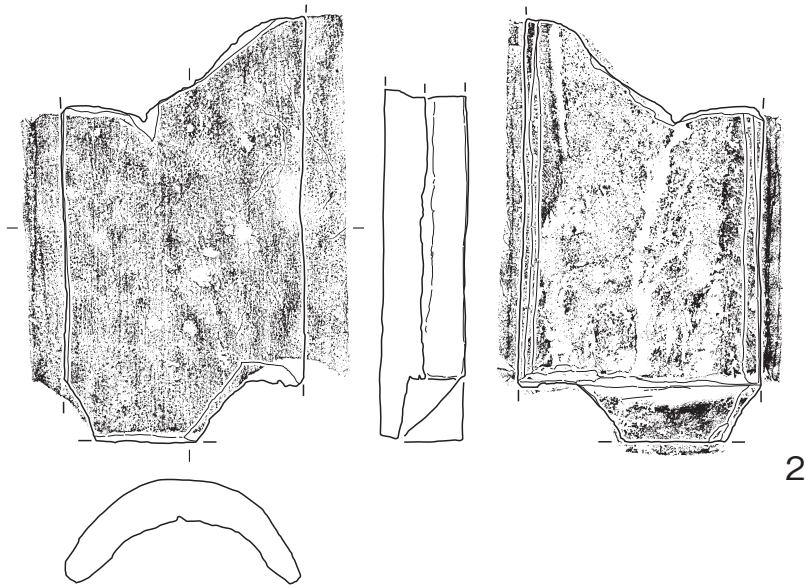
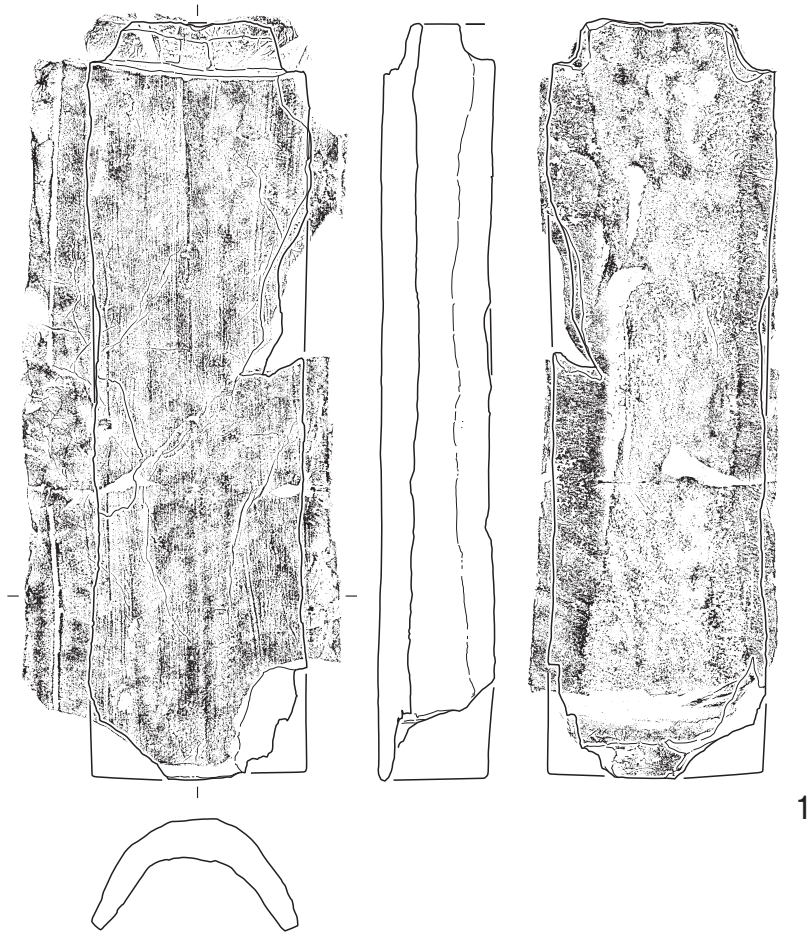
## (1) 丸瓦

1は全形復元された丸瓦で、長さ40.0cm、幅11.5

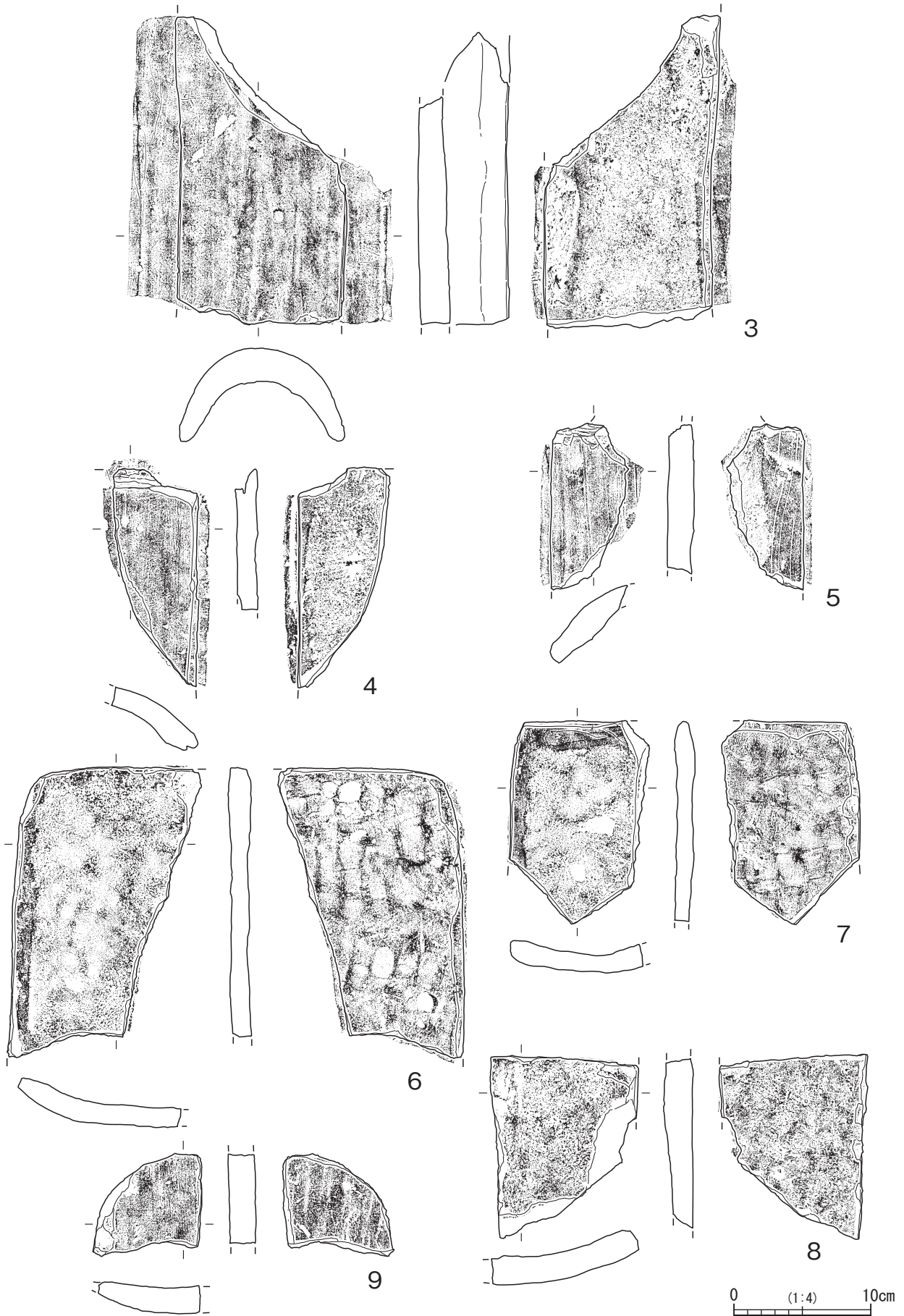


図版1 ケン・ブルン遺跡の位置と採集地点 (Google Earth 画像を改変)

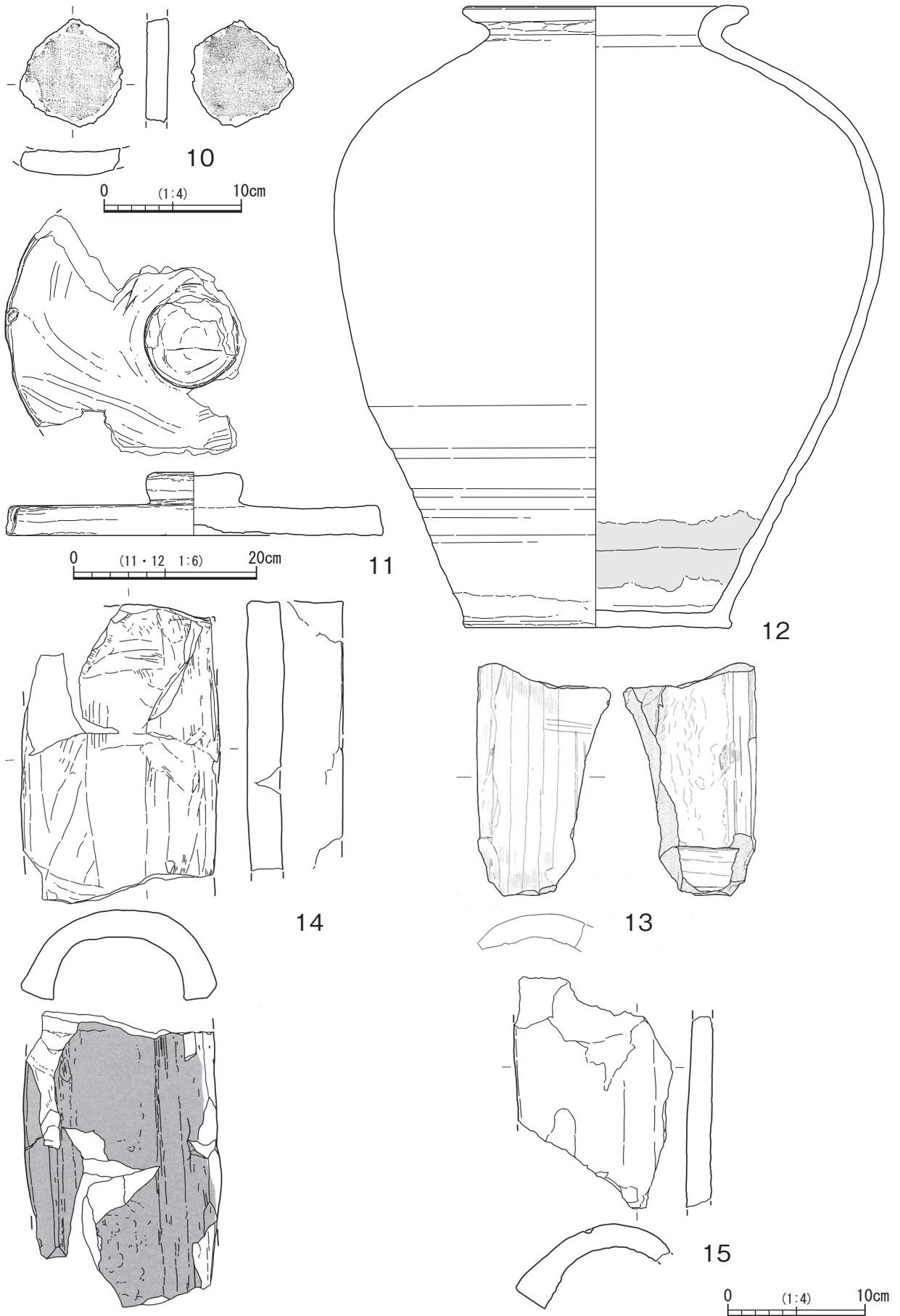




第1図 ケン・ブルン遺跡の瓦 (1)



第2図 ケン・ブルン遺跡の瓦 (2)



第3図 ケン・ブルン遺跡の遺物と関連資料





図版2 ケン・ブルン遺跡の瓦と土器

～12.0cm、厚さ1.6～1.9cm（上下の接続部の厚さは0.5～0.8cm）である。還元炎焼成で、色調は褐色味のある灰色を呈し、胎土には長石粒等を含む。半円筒形の成形台に粘土板を載せて成形した丸瓦である。上端には丸瓦どうしの連結のための幅9cm、長さ3cmの削り出し部分があり、その両側は丸瓦の幅を1.5cmほど削除して「玉縁」状とし、連結部としている。また下端の凹面側に丸瓦上端の接続部を受けるために内面を0.5cmほど薄く削った幅2cmの段差をもつ連結部が作られている。凸面側は縦方向のナデによる調整痕が5～6条あり、表面に横方向の細かな擦痕が認められる。また中央左側面には粘土の突出部分をヘラ削りで平らに調整した削平痕があるほか、両側面寄りには長辺に沿うように1本の線がある。また凹面側の表面に布目痕はなく、砂粒が全体的に付着する。この砂は成形台から瓦を分離するさい、型離れをよくするために散布した「撒き砂」である。また両側面に沿うように幅2～4cmのヘラによって調整したヘラ削りの痕跡がある。

2は端部側の長さ23cm、幅12.6cmの破片で、厚さ2cm、連結部では厚さ1～1.5cmである。焼成は還元炎（一部酸化炎）焼成で良好であり、色調は灰褐色で、胎土には長石粒を含む。凸面側は縦方向のヘラナデ痕が6条ほど筋状に認められる。凹面側は表面に径1～2mmの円礫、褐色粒、長石粒などが多量に付着し、側縁は幅1.5～2cmのヘラ削り調整を行う。また下端は幅3cm、深さ約1cmを削り、厚さ1～1.6cmの連結部を削り出しにより作る。

3は上下端を欠く破片で、長さ22cm、幅12cm、厚さ1.7～2.1cm。還元炎焼成で、灰黒色を呈し、胎土中には長石などを含む。凸面側は7条程度の縦方向のヘラナデ調整を行い、ナデによって表面が青黒い光沢を生じている。両側縁にはヘラ削りを行い、右側縁に沿って線が1条入る。凹面側は表面に砂粒が多く付着し、この瓦片が竈などに転用されたらしく、カーボンが厚く付着する。また凹面の両側縁に沿って、幅3～4cmのヘラ削りが行われている。

4は丸瓦の上端の連結部が残る17×7cm、厚さ1.5cmの丸瓦片。色調は灰色、還元炎焼成で、焼成は良好であり、胎土には長石粒などやや多く含む。凸面側には縦のヘラナデ痕があり、上端は凸面側をヘラ切りによって薄くしたのち、両脇をヘラ削りにより丸瓦の幅より狭く突出させ、連結部を作り出している。また側縁に沿ってヘラ削り調整を行う。凹面の

表面には、長石や石英粒などの径0.5～1mm程度の砂粒が多く付着する。また両側縁に沿って幅1.5cm程度のヘラ削り調整を行う。

5は上端の連結部を一部残す12.5×5.8cm、厚さ1.8cmの小破片。酸化炎焼成で、橙色を呈し、胎土は長石、雲母などを含む。凸面側は縦方向のヘラナデ痕を4条もち、側縁をヘラ削りする。連結部は8mmほど削り、厚さ7mm程度の連結部とする。凹面には表面に長石、雲母などの砂粒が付着し、側縁は幅3～4cmのヘラ削りとする。また凹面側には縦方向のナデ調整の痕跡があり、長い砂粒移動痕がある。

## (2) 平瓦

6は角を1箇所残す平瓦片で、21×13cm、厚さ1.2～1.6cmの破片である。還元炎（一部酸化炎）焼成で灰色を呈し、胎土には黒色粒、長石粒などやや多く含む。全形は不明だが、幅25cm以上、長さ30cm以上の方形もしくは長方形とみられ、角はやや丸みをもっている。平瓦の凹面側は指頭痕とみられる圧痕が付着し、側縁に沿ってヘラ削りを行う。また表面には長石粒が付着する。凸面側は指頭痕とみられる圧痕が規則的にならび、側縁に沿ってヘラ削りを行い、側縁、上端面はヘラ削りによって調整している。

7は角部を残す15×10cm、厚さ1.5cmの破片で、全形は不明だが、方形、もしくは長方形と推定され、角はやや丸みがある。還元炎焼成で、灰色、灰褐色を呈し、焼成良好で、胎土には長石粒を含む。凹面側は斜め方向に指頭痕とみられる圧痕を多数もち、表面には長石粒、雲母などの砂粒が付着し、側縁にはヘラ削りをもつ。凸面側は規則的な指頭痕とみられる圧痕をもち、側縁はヘラ削りを行う。また端面にはヘラ削り調整が認められる。

8は側縁を一部残す平瓦で、13.5×11cm、厚さ1.5～2cmの破片。還元炎焼成で、焼成良好だが、被熱によって表裏とも灰黒色を呈している。胎土には長石などを含む。凹面側は表面に長石などの砂粒が付着し、側縁、側面はヘラ削り調整を行う。凸面側には弱い指頭痕とみられる圧痕が部分的に付着する。

9は平瓦片で、7×8cm、厚さ2cmの小破片。側縁を残すが、全形は不明。灰色の還元炎焼成で、胎土には長石粒など少量含み、焼成は良好で堅緻である。凹面側はヘラによる縦ナデ、ヨコナデ調整を行い、表面に砂粒の付着はない。凹面側には何らかの圧痕をもつ。平瓦としたが、技法的にみて丸瓦の可

能性がある。

### (3) 土器類

ケン・ブルン遺跡では壺、甕類をはじめとする多量の土器が採集されているが、甕と蓋の2点を図化した。

第3図11は蓋で、直径41cm、中央に径10.5cmの円形のつまみをもつ。器壁厚は3cmと厚い。表面、つまみは無文で、パン焼き竈の蓋とみられる。

第3図12は甕で、ラバトA地点の現地表下数mの土取り面の底面に、正位埋設された状態で見つかり、急遽取り上げられたものである。口径31.5cm、器高68cm、底径29cm、胴部最大径60.5cm、器壁厚1.5cmの完形品で、底部近くの内壁面に白色付着物が帯状に認められる。口縁部は強く屈曲して広がり、装飾はない。色調は灰褐色である。

土器の時期は不詳であるが、形式的にはともに12世紀以降であろう。

なお参考資料として、以前報告された丸瓦を掲載する。第3図13の丸瓦は、幅10cm以上で下端部凹面側に連結部の段差をもち、報告によれば、「凹面にいかなる明瞭な製作痕も見出せないが、おそらく型作りにより成形されたと考えられる。また、凹面および凹面の長辺両端は丁寧なケズリ調整により仕上げられており、還元焰により焼成されていることから全面が青灰色を呈している。こうした特徴からのみ時期を判断することは難しい。」と記すもので、今回報告の丸瓦と同じ特徴をもつことがわかる(山内ほか2016)。

## II. 製作技法と関連資料

ケン・ブルン遺跡の瓦の製作技法について整理しておきたい。平瓦は、表面が丸く盛り上がった成形台に粘土板をのせて1枚ずつ作る、いわゆる「1枚作(造)り」である。また丸瓦は半円筒形の細長い成形台に粘土をのせて1枚ずつ製作する成形台作りである。ともに成形台と粘土の間には布を挟まず、型離れのための撒き砂を用いている。各瓦の製作技法は以下のように推定できる。

### (1) 丸瓦

- ①粘土板の片面に砂粒を撒き、その面を下にして成形台にのせ、凸面となる上面を指頭で連続的に押圧して成形台に密着する。
- ②凸面を縦方向に6～8回ほど、ヘラナデ調整す

る。

- ③両側縁をヘラ削り調整し、片方の端側を削り上端側の連結部を作る。連結部は凸面側から切り込みを入れた後、端面側から切り込みを入れ、段差を作り、その両脇を削り取る。
  - ④型から外し、凹面の両側縁をヘラ削り調整する。
  - ⑤下端側の凹面に連結部を削り出す。凹面側から切り込みを入れた後、端面側から切り込みを入れ、段差を作る。
  - ⑥乾燥する。
- ### (2) 平瓦
- ①粘土板の片面に砂粒を撒き、その面を下にして成形台に載せ、凸面を指で連続押圧して密着する。
  - ②両側縁、側面をヘラ削り調整する。
  - ③型からはずし、凹面を指頭で調整するとともに両側縁をヘラ削り調整する。
  - ④乾燥する。

なお丸瓦の一部には、凹面に撒き砂が付着しないものがあり、撒き砂工程を省略した可能性があるが、基本的には上記の工程に沿って瓦の成形、調整が行われている。粘土板の切り出し方法については不明だが、粘土塊(タタラ)から糸切りしたとみられ、本来、切り離しの糸切り痕を伴うことが考えられる。しかし指頭痕やナデ、砂粒の付着により糸切り痕は不明で、一部に糸切り痕の可能性のあるシワが認められる程度である。ここでは仮に糸切りによる粘土板の切り出しを想定するが、各瓦の断面図が示すように、丸瓦での粘土の厚みは不均一で、中央が厚く、側縁側が薄くなっている。よって糸切りではない可能性もあり、今後、遺物観察に立ち戻って再考する必要がある。

これらの資料は出土状況が不明な採集資料で、製作された時代は不詳である。また瓦とともに保管されている土器類は同じケン・ブルン遺跡からの出土ではあるが、瓦との関連性は不明である。

## III. キルギス国内の瓦

キルギス国内では、アク・ベシム遺跡第2シャフリスタン(碎葉鎮推定地区)で唐代の瓦類が多量出土している。それ以前の瓦の存在については未確認であるとともに、西側からの瓦の流入に関し管見では不詳である。したがって、キルギス国内に初めて



瓦導入が行われたのは碎葉鎮が建設されたとされる西暦679年前後で、瓦の製作から焼成までの一連の製作は唐の技術導入によって行われ、その契機は都城建設であったと考えておく。

アク・ベシム遺跡第2シャフリスタンの唐代の瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、罫斗瓦からなる。丸瓦、平瓦ともに凹面側に布目痕をもつ布目瓦で、丸瓦は円筒型を用いた2分割による円筒作り、平瓦では桶型を用いた4分割による桶巻き作りである。平瓦内面の側縁には、上下2箇所ずつ計4箇所に布目の上から押したような丸い窪みがあり、瓦を4分割する際に分割の目印とした「分割界点」とみられる。軒丸瓦の瓦当文様は複弁および単弁蓮花文、連珠蓮花文で珠文帯をもち、これまでに6型式以上が確認されている。軒丸瓦の裏面および丸瓦部の端面には、軒丸部と丸瓦部との接合を強化するための連続刻みやカキメが入れられている。軒平瓦は2点のみの出土であるが、平瓦端面に竹管で2条の平行線文様を施文し、その中にヘラで羽状の連続刻みを入れ、下縁部に波状連続押圧文を施した「波状重弧文軒平瓦」である。罫斗瓦は1枚分の平瓦を縦に3分割した細長い瓦で、片方の側面のみヘラナデ調整し、破面を整えている。それらの瓦の製作技術や焼成技術は、碎葉鎮築城時に中原の瓦当範や桶型などの製作道具類とともに直接的に導入されたもので、派遣部隊の中に瓦職人などの建築技術者が含まれていたであろう。また碎葉鎮に建設された官衙建築についても、礎石建ての中国風建築様式であったと考えられる。瓦の年代に関しては、軒丸瓦の瓦当文様型式を参考にすると、型式学的に後出的な文様も含まれることから、7世紀末から8世紀前半のなかの時間幅での変遷過程を想定が可能である。ただし、碎葉鎮の唐による実質的な支配期間は短く、678～703年であり、719年以降、唐は名実ともに碎葉鎮を放棄したとされている<sup>2)</sup>。

アク・ベシム遺跡関連の瓦の出土例として、小アク・ベシム遺跡での採集資料があるほか、ビシュケクの国立歴史博物館にアク・ベシム遺跡採集の軒丸瓦が展示されている。小アク・ベシム遺跡はアク・ベシム遺跡の北方2.5kmに所在する小規模な高台を利用した城館跡で(図版1-4)、アク・ベシム遺跡との関連性がうかがえる。第3図10は2016年の小アク・ベシム遺跡の踏査のおり採集された凹面に布目をもつ平瓦の小破片である。灰色を呈した還元焼

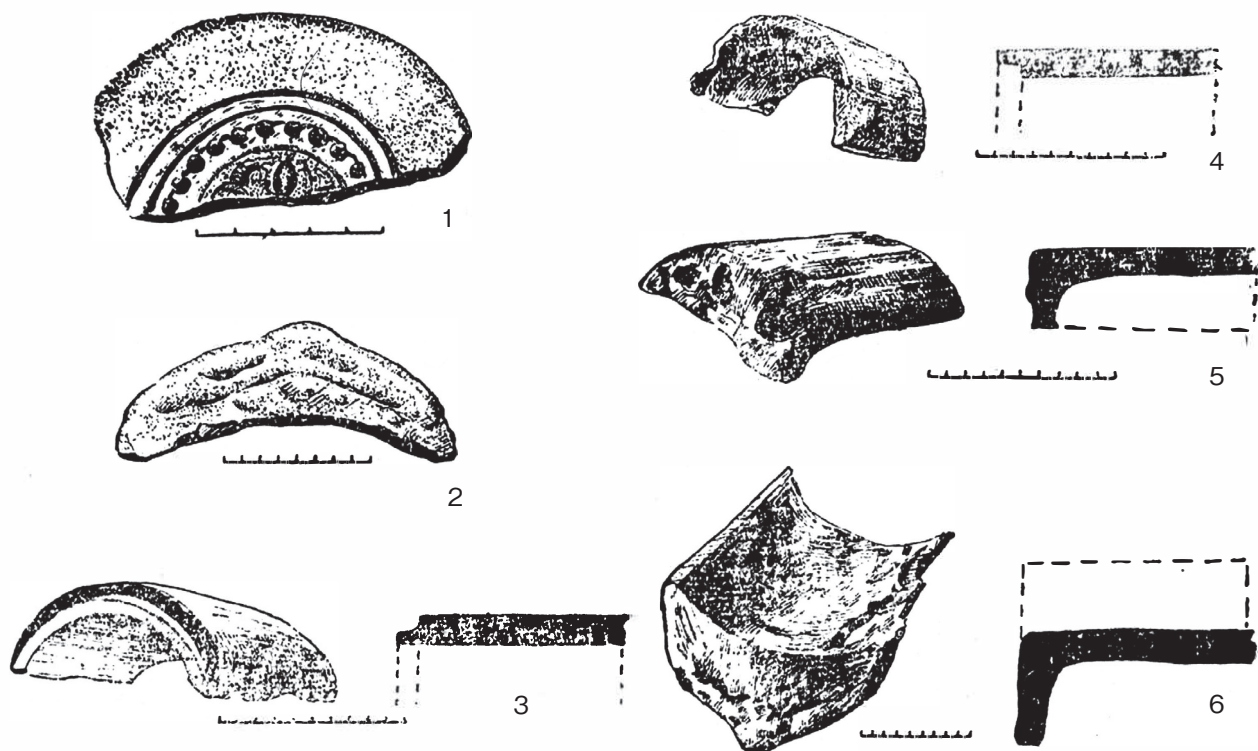
成で、桶巻き作りである。ただし瓦が多量に散布する状況ではないことから、遺跡内に瓦葺き建物が存在した可能性は弱い<sup>3)</sup>。

また出土遺跡は不明ではあるが、チュー川流域の資料としてケン・ブルン遺跡類似の丸瓦および滴水瓦の存在が知られている。1959年刊行のチュー川流域での遺跡分布調査の報告の中に掲載されたもので、遺跡名の記載はないが、10～12世紀というキャプションが示されている(Kozhemyako1959)。これらの資料をアク・ベシム遺跡で採集された瓦とする文献もあるが<sup>4)</sup>、コジェミヤコの報告文中にはそうした説明はない。

第4図は、コジェミヤコの報告に掲載された瓦である。1は軒丸瓦で、唐代の珠文帯をもつ蓮花文であることから、アク・ベシム遺跡の採集品であろう。3・4は丸瓦で、3には凸面側に段差があることから上端を残す丸瓦、4は凹面側に段差をもつことから下端部を残す丸瓦であり、ケン・ブルン遺跡例ときわめて類似する。2・6は滴水瓦とみられる軒平瓦である。5は軒丸瓦とみられるが、瓦当文様ははっきり図化されていないものの、丸瓦部の凸面に縦方向のナデ調整を持つ点はケン・ブルン遺跡例と共通する。2～6が同一遺跡での採集品である保証はないが、3・4はケン・ブルン遺跡での採集品の可能性が高く、2・5・6についてもケン・ブルン遺跡の資料と推察する。なお滴水瓦は、日本では文禄、慶長年間以降の城郭建築に採用されたが、中国では10世紀代の遼以降に存在する(佐川2010、城倉2021)。

また、2019年調査のアク・ベシム遺跡第2シャフリスタン1号ピット出土資料中、11～12世紀の丸瓦が2点出土している。報告書では土管として報告され、「丸瓦風で、内外面とも無文である。製作技法は円筒形を半截しており、形態、技法ともに丸瓦に類似していることから、丸瓦の影響を受けて作られた可能性がある」と記されている(山内・櫛原ほか2020)。本稿ではそれらを丸瓦として再報告したい。

第3図14・15は幅14.5cmの半円筒形を呈した丸瓦で、側縁をヘラ削りによって調整している。円筒を縦に2つに半截したものとみられるが、側縁側がやや厚く不均等であり、検討を要する。凹面には布目痕はなく、撒き砂の付着は不明で、撒き砂を用いていない可能性がある。端部には連結部の構造はなく、ヘラ削り調整で角頭としている。凸面には縦方



第4図 チュー川流域の瓦 (Kozhemyako.1959 を改変)

向のナデ調整を行い、色調は土器類に似た酸化炎焼成である。炭素14年代測定によれば、1号ピットは11世紀後半～12世紀前半であり、丸瓦についても同時期の年代観を想定しておく。形態、分割方法、調整技法は唐代の丸瓦の影響を残すが、布目をもたない点はケン・ブルン遺跡と共通し、新しい技法といえる。この瓦が使用された建物は不明であるが、第2シャフリスタン内に存在した大雲寺の可能性も指摘できる<sup>5)</sup>。

以上によりキルギス国内では、アク・ベシム遺跡第2シャフリスタンの7世紀代の瓦(第I群)、11～12世紀代の第2シャフリスタン1号ピットの瓦(第II群、第3図14・15)、ケン・ブルン遺跡の瓦(第III群、第1・2図1～9、第3図13)の3群の存在が明らかとなった。ケン・ブルン遺跡の瓦(III群)の年代については、II群の系譜を引きつつ、独自要素をもつ新しい様相が認められることから仮に13世紀代としておく。I群とIII群の間には技術的連続性がないように見えるが、II群を介在することによって一連の系譜をもつことがわかる。このようにチュー川流域では7世紀末に碎葉鎮建設に伴ってI群が出現したのち、8世紀後半以降、屋根瓦の利用は著しく衰退するものの、11～12世紀代にII群の瓦が用いられ、

さらにより新しい特徴をもつIII群が存在する。したがってI群→II群→III群という瓦の変遷過程が想定される。

平瓦の1枚作り技法は、東アジアでは日本に存在する。日本の平瓦の技術的変遷をみると、当初4分割の桶巻き作りで、粘土紐巻き上げ技法からやがて粘土板巻き付け技法に変化するが、8世紀代前半～中葉に1枚作りへと変化を遂げ、以後1枚作りが一般的となる。また丸瓦も粘土紐巻き上げ技法から粘土板巻き付け技法へ変化し、8世紀後半代の国分寺造営段階では、成形台の上で1本ずつ作る横置き型1本造りへと変化するが、日本の成形台を利用した製作技法が中央アジアに伝播したことは到底考えられない。また中国および韓半島では近代に至るまで一貫して平瓦は桶巻き作りであり、1枚作りの製作技法は管見では知らない。

このようにケン・ブルン遺跡の製作技法は、唐代の円筒型、桶巻き作りの系譜を直接引くものではないが、丸瓦が連結構造をもち、玉縁類似の連結部を有す点から、唐代の丸瓦の系譜下にあるといえる。また布目痕をもたない点はアク・ベシム遺跡第2シャフリスタン1号ピットと共通する一方、下端側にも連結構造をもつ点は独特である。



## おわりに

ケン・ブルン遺跡での採集資料は丸瓦と平瓦であり、両者を交互に組み合わせて建物屋根を葺いた屋根瓦であることには異論がない。しかし本遺跡に瓦が存在する理由については不明で、官衙的建物や仏教寺院などの存在や、中国の影響を考え得るかどうか、今後、遺構や遺物面および文献史料から検討されなければならない。またケン・ブルン遺跡例の時期は定かではなく、仮に13世紀だとすると、この地域の歴史的経緯とどのような関連があるのか、今後検討していきたいと考える。

なお本稿執筆にあたり、アク・ベシム遺跡の調査団長であり文化財研究所長である山内和也氏、キルギス共和国国立科学アカデミー歴史遺産文化研究所のバキット・アマンバエヴァ氏には資料報告の機会を与えていただいた。また本資料については、2022年10月の文化財研究所内の研究発表および科研関連考古学班オンライン研究会にて報告し、出席者よりご意見をいただいた。関係各位には心より感謝申し上げる次第である。

なお本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(S)「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表：山内和也、課題番号21H04984)の助成を受けた成果の一部である。

## 註

- 1) 城倉正祥氏は、アク・ベシム遺跡の軒丸瓦はⅠ型式(複弁蓮花紋瓦当)、Ⅱ型式(単弁蓮花紋瓦当)、Ⅲ型式(連珠紋瓦当)に大別し、Ⅰ型式(7世紀後半)、Ⅱ型式(7世紀後半～8世紀初頭)、Ⅲ型式(8世紀後半)を想定し、Ⅰ型式は高宗段階で盛行したやや古い瓦当、Ⅲ型式は751年の記録にみる大雲寺存続段階の瓦と推測し(註5)、唐長安城の外郭城での瓦生産の系譜を引くものであることを指摘した(城倉2020)。
- 2) 柿沼陽平氏による研究会資料(2017年7月4日第2回帝京大学シルクロード学術調査報告会)によれば、唐が碎葉を実質的に支配したのは678～686年、692～703年である。碎葉鎮の建設、修復については678年と692年段階の2期が考えられるほか、700年には唐が安史那斛瑟を平西軍大総管として碎葉に派遣していることから、2～3回の建物更新が想定できる。
- 3) アク・ベシム遺跡から運ばれた可能性や、小アク・ベシム遺跡周辺で瓦を焼成した可能性が考えられるが定か

ではない。アク・ベシム遺跡と小アク・ベシム遺跡の関連性を示す現象とみておきたい。

- 4) ヌルラン・ケンジェアフメト氏はベルンシュタムの調査での出土として報告し(ヌルラン2009)、城倉正祥氏もまたアク・ベシム遺跡ラバト内仏教寺院(大雲寺)出土とする(城倉2021)。しかしコジェミヤコの報告には採集地点に関する記載が見当たらない(Kozhemyako1959)。
- 5) 第2シャフリスタンの1号ピット出土瓦については、大雲寺関連の瓦であったと考えることも可能である。大雲寺は、690年に武則天の勅令で洛陽城、長安城、諸州に建立された。『通典』にはタラス河畔の戦いに従軍した杜環が751年に碎葉を訪れたことを引用し、それによれば748年に北庭節度使の王正見が碎葉鎮城を攻撃し、かつて交河公主が居住した場所に大雲寺が現存していたことを記していることから、山内氏、城倉氏は第2シャフリスタン第0仏教寺院が大雲寺であったと推定する(望月・山内・バキット2020、城倉2020)。また城倉氏は、コジェミヤコ報告の滴水瓦を大雲寺関連の瓦であるとしたうえで、滴水瓦は中国では五代十国の南漢に原形ができ、北宋期(960～1125)に存在したことから、大雲寺が北宋期まで法灯を絶やさなかったと推測した(城倉2020)。また城倉氏は滴水瓦がアク・ベシム遺跡第0仏教寺院出土であれば、北宋期に中原から流入した可能性を考えるのが妥当としている(城倉2020)。しかしベルンシュタムの調査報告によれば、第0仏教寺院(推定大雲寺跡)からは唐代の単弁蓮花紋および連珠紋軒丸瓦の出土が知られているが、滴水瓦および関連瓦の報告はない(川崎・山内2020)。

## 引用・参考文献

- 山内和也・安倍雅史・山藤正敏 2016「ケン・ブルン遺跡の考古学調査」『キルギス共和国チュウ川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡—2011～2014年度—』中央アジア文化遺産保護報告書 第13集キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 61-74頁
- 川崎健三・山内和也 2020「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査—1939年、1940年—」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 215-245頁
- 佐川正敏 2010「中国における造瓦技術の変遷—「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換を中心に—」『古代東アジアの造瓦技術』奈良文化財研究所研究報告 第3冊 77-95頁
- 城倉正祥 2021『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所調査研究報告第5冊
- ヌルラン・ケンジェアフメト(加藤九祚訳) 2009「スヤブ考古—唐代東西文化交流—」『イリ河歴史地理論集』松

香堂 217-301頁

望月秀和・山内和也・バキット アマンバエヴァ 2020「空中写真によるアク・ベシム遺跡 (スイヤブ) の解析」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集 61-126頁

山内和也・榑原功一ほか 2020『アク・ベシム (スイヤブ) 2019』帝京大学シルクロード学術調査団調査研究報告3 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー

Kozhemyako.P.N.Rannesrednevekovyye gaoroo I poseleniya Chuyskoy doliny.1959 Frunze.